

## パーソナリティと人間の評価

— 反能力心理学 —

藤 永 保

お茶の水女子大学

人間の精神機能を最も原始的な次元にまで分類し整理しようとする試みは能力心理学と呼ばれ、19世紀初頭にはヨーロッパに広まったといわれている。その分類の体系にはいろいろの迂余曲折があったが、最終的にはおおむね知性・情動・意志の三つの能力を立てるに至った。これがいわゆる知・情・意三分説であり、ヨーロッパの一つの伝統思想をなしてきた。漱石が草枕に引用していることから知られるように、その影響には広く深いものがある。

しかし、知・情・意の三区分のうち意志はむしろ情動を抑制する機能として後天的に発達してきたとみられるから、この両者は總括して情意機能と呼ばれることも多い。情意機能の個人差が性格またはパーソナリティ（人格）である。一方、知的機能における個人差は知能と呼ばれる。現代心理学においては、知・情・意三分説はむしろ知能と人格の二分説と化した。

このように知能と人格とをきっぱり峻別するところから、またさまざまの派生物が生まれる。たとえば、知識・技能・関心といったような評価の体系も背景にはこうした発想を秘めているのであろう。そうして、最も大きな影響は、このような観念のもとでは知能と人格の両者がともに偏った貧しいものとしてしまふ点である。この問題については、むしろ本家の西欧の心理学者の側に反省の色がみられる。たとえば、Jaylorは現行知能検査は要素

的・断片的知識をできるだけたくさん貯留し、できるだけ速くとりだす能力を測っているにすぎないとする。これは西欧的知能観からくる幅の狭さであり、もし東洋人が知能検査を創りだしたなら成熟した判断力といった人格的要素を入れるであろうという。

些末な知識検査を主眼とする受験教育に熱中している我々には、このJaylorの指摘を受け入れる資格はほとんどない。しかし、原理的な問題として知能と人格とを峻別しようか否かはやはり重要な論点をなすものであり、我々のもつ教育体制のあり方を反省する意味でも再考の必要があろう。

単純な意味での知能にも、やはり人格的要素の影響は根強い。Kagan'sは、一貫してIQの上昇するタイプには達成欲求が高い・挑戦の意欲に富む、積極的などの性格特性が強いこととみいびしている。我々の調査では、IQの高い上昇型には家庭の干渉と容認とのバランスのとれていることがみられる。一方また、Rokeachはいわゆる偏った権威主義的人格は、実は字のとおり情報処理の機割の狭さによるものとしている。知性と人格とは相互に影響しあう。

Eriksonは、長いモラトリアムをへて初めて自我同一性を獲得した人々は独自の思想的同一性の達成によりこれをなしとげるとする。ここには、知性と人格との融合が認められるであろう。知性と人格とをともに豊かなものに見直さうとする視点が望まれる。